

社

説

暫定リスト入りを弾みに

佐渡金銀山

国連教育科学文化機関（ユネスコ）の世界文化遺産登録を目指す佐渡金銀山遺跡が、登録の前提となる国の暫定リストに単独で掲載される方向となった。

文化審議会の特別委員会が鉱山経営などの独自性を評価した。文化庁がリスト掲載の条件としていた島根県の世界遺産、石見銀山遺跡との統合・拡大方針は見直された。

400年以上にわたり国内外の採掘技術や手法を導入、発展させ、アジアの鉱山開発にまで影響を与えた佐渡金銀山の価値が、あらためて認められたといえる。

1997年に郷土史家らが登録を指して動き出し、県と佐渡市による文化庁への提案を経て、10年以上続けた活動がようやく一歩前進した。地域の歴史文化の保全や継承に弾みが

き、世界への発信、交流人口の拡大にもつながると期待が膨らむ。

ただ、道のりはなお遠い。登録推薦に向けた構成資産の調査や史跡指定など息の長い取り組みが必要となる。ユネスコ世界遺産センターへの推薦書提出後も、現地調査や審議が続く。

目の前のハードルも高い。ユネスコは遺産の偏りを避けるため、同種の遺跡については1国1件の登録という方針を取る。そこで、2008年に佐渡の石見への統合案が浮上したが、石見側が反発、交渉は難航していた。

今回、単独記載への方針転換を受け、佐渡金銀山遺跡はリスト入りの際の名称を「金を中心とする佐渡鉱山の遺跡群」に変更した。「金」を前面に打ち出し、登録を狙う。

リストに載る国内候補は13件となるが、姫路城が先に遺産登録されたため18年たっても推薦されない彦根城の例

もある。石見との違いを明確にした上で、ライバルを上回る普遍的価値を示せるかが鍵となろう。

島民らの理解や協力も欠かせない。文化財の保護には必ず地元が伴うからだ。石見には、半世紀を超える住民全員参加の活動があった。一方、1992年にリスト入りした「古都鎌倉の寺院・神社ほか」は一部の寺の同意が得られず足踏みが続く。

佐渡では、県や市、市民団体が講演会や現地見学会を開いたり、小学校が

学習に取り入れたりして、盛り上げを図る。島内の機運を醸成し、さらには県内隅々まで輪を広げていきたい。

世界遺産だから大事にするのではない。愛着を込め、後世に営々と引き継ぐ気概に支えられた「ふるさとの宝」だから、大切なのだ。その思いが結実してこそ、世界に誇る遺産だと認められるのではないだろうか。

歴史は地に根差す住民が紡ぐ。佐渡金銀山がさらに輝きを増すかどうか、私たちの磨き方次第であろう。